

方法としての「混血」

——武田泰淳を中心として——

王 俊 文*

〔要旨〕本稿では、敗戦前後を境に中国文学研究者から戦後派作家に転身した武田泰淳（1912～1976）の「混血観」を考察する。敗戦直前の上海生活を語る『上海の蜚』と、戦後中国に対する基本姿勢を総括する『風媒花』という二つの長篇小説を考察することによって、生物学的な意味における外部の多元性を尊重し、実存的な意味における内部の多元性を用いた泰淳の独特な「混血」観を解明したい。泰淳の実存的な「混血」観は、立場の複雑性とアイデンティティの葛藤に苦しむ人間が生きる「方法」として、今なお有効であると思われる。

一、問題提起

周知のように、武田泰淳（1912～1976）¹⁾は日本戦後文学の代表的な作家であるが、中国文学研究者としての一面を持っている。小説家としての文名が高まる以前、彼は1934年に発足した中国文学研究会の中心メンバーであり、中国文化を「愛する」中国文学研究者であった。²⁾だが、日中戦争が勃発すると、泰淳は研究者としてではなく兵士として、生涯を捧げようとした中国に赴いた。その二年間の戦場体験（1937年10月～1939年10月）と、「混血児の溶鉱炉」³⁾の上海で味わった敗戦体験（1944年6月～1946年4月）は、多彩な変形を経て彼の作品に結晶している。

中国体験が泰淳の創作に与えた影響については、戦場体験と「生き恥さらした男」⁴⁾である「司馬遷」像との関係や、「敗戦体験」と「彼の発想を強固に支える二つの倫理的な柱」の一つである⁵⁾「滅亡」論⁶⁾との関係がよく論じられる。また、それ以外に「民族」や「混血」への視線を指摘する研究も数少ないが存在する。例えば、三宅芳夫は小説「女の国籍」（1951年）を取り上げ、「ナショナリズム」の言説が前景化していた1951年における泰淳の「民族」への眼差しを検討し、「混血児があいまいな存在でなくなる時代が来るよ」という「鉄の殻」を超越する泰淳の声を評価する。⁷⁾また郭偉も「女の国籍」に注目し、泰淳の「上海物」に登場する「混血児の女性」に関心を寄せ、男／女の両性を相対化しようとする泰淳の認識のありようを考察している。⁸⁾

*非常勤講師／日中近現代文学

だが、これらの研究において、「混血」というテーゼに対する泰淳の執着は十分に検討されていないように思われる。郭偉は「泰淳は『混血』というモチーフを執拗なまでに反復している」と指摘するものの⁹⁾、論述が取り上げた作品に限定されているためか、「性別」の記述に紙幅を費やし、あまり「混血」を正面から論じていない。三宅の論文も「民族」に対する関心に終始する。だが、「混血」というモチーフを検討するに際して、「民族」や「性別」という視点よりも個体の生き方にまつわる方を重視して検討する必要があるのではないだろうか。なぜならば「混血」というテーゼは、泰淳が人生の転換期にある時にこそ現れる重要な発想だからである。例えば敗戦前後、「混血児の溶鉱炉」の異国「孤島」(上海)で、混血児や「祖国喪失者」と接することによって、泰淳は自国の「滅亡」を受け入れる思索の契機を持つようになる。また、戦後、自分の中国コンプレックスを総括し、研究者から作家へ転身する時、「混血」は一種の決意表明として象徴的な役割を果たしている。このように泰淳にとって「混血」は個人の生き方に関わる実存的なテーゼだったのではないだろうか。

「混血」が重要なテーゼとして浮かび上がる作品に、敗戦直前の上海生活を語る『上海の蜚』(1976年)と、戦後中国に対する基本姿勢を総括する『風媒花』(1952年)という二つの長篇小説がある。本稿はこれら二作品を考察し¹⁰⁾、武田泰淳文学における「混血」の意味を検討したい。

二、『上海の蜚』における「混血」——外部の多元性

1、「語れない」上海生活

泰淳の「混血」観は敗戦前後の上海での生活を抜きにして語れず、その意味において『上海時代の日記』をもとに、当時の生活を再現したものである¹¹⁾『上海の蜚』は重要である。この作品は泰淳生涯の最後の小説で、1976年2月から9月まで雑誌『海』に連載された。既に自分で筆をとることが不可能となっていた泰淳が口述し、百合子夫人がそれを筆記した創作であったが¹²⁾、「あと一篇で完結する予定であったが、著者が逝去され未完となった」¹³⁾。

『上海の蜚』は泰淳の日記をもとにしており、主人公の「私」が「武田先生」と呼ばれることから、作品は東京を離れた1944年6月から翌年終戦直前までにおける泰淳の心境を理解する重要な手がかりになると思われる。泰淳は最初の長篇小説『風媒花』¹⁴⁾において、「作者である武田自身がモデルになっている」¹⁵⁾主人公峯の口を借り、「(中国文学の翻訳をやりたくない——筆者注)原因はすべて、俺の上海生活にあるよ」、「俺はいろいろ上海物も書いたがね。あれは全部が嘘とまで言えないにしろ、きわめて大衆小説的事実でね。真実は死ぬまで語れないかも知れない」と述べている。¹⁶⁾そのような泰淳において、死の間際に初めて自分の上海生活を語ること自体、意味深いことであった。

2、『上海の蜚』における「混血」言説

小説においては二つの言葉が高い頻度で用いられている。一つは「左翼くずれ」であり、もう一つは「混血児」である。戦争中、泰淳が上海で勤めていた「中日文化協会」は、日本側の理事長をはじめ、多くの左翼転向者が集まる文化機関であり、出入りする文学者も「左翼くずれ」が多かった。旧制高校と大学時代、拘置所の経験を繰り返した泰淳は¹⁷⁾、日本の文化出先機関に身を寄せた同類の「転向」者に終始深い関心と同情を持っていた。この関心と同情は泰淳が青春時代から引きずる内面の「うしろめたさ」に対して、「混血」の思考は戦時上海という特殊な環境ならではの産物と思われる。

小説では、理事長の可愛い女性秘書・林小姐を「日本人の女性と中国人の男性の間に生まれた混血児だった」と紹介し、その後も何度か彼女の混血に言及する。その際、T氏の子供(陶晶孫の子供、泰淳は会ったことがない——筆者注)がよく連想の対象になる。例えば林小姐の父の葬儀に列席したT氏を見て、「彼にも日本人の妻があり、混血の男の子が二人いるはずだ。しかも、林小姐とT氏の息子たちは幼馴染だということだ」と連想している。万国公墓に魯迅の墓を見に行った時も混血のことを忘れず、「日蓮宗や浄土宗に帰依する日本人の墓は、ここに混っているのだろうか。雑種もここに永眠している?さて、どうだろうか」と述べている。

第五章の「雑種」は、タイトルからも分かるように「混血」を集中的に語った章である。この章では、大東亜文学者大会第三回南京会議からの帰りの列車上の光景や文化協会の忘年会、旧正月の暮らしなどが延々と語られるが、終わりに近いところで「混血」の話が出る。

「私」は『漢書』『後漢書』の巻を拡げ、「王昭君の記事を探す」。そして「無理やりに異民族と結びつけられた女性には、混血の娘たちが生まれたはずだ。その娘たちは、やはり、さぞかし美女だったであらう。彼女たちは、その後、はたして漢人と結婚したのだろうか。それとも匈奴の一員として同化してしまったのだろうか」と思いを馳せる。「この混血児のややこしさ」はすぐ「人間以外の存在かもしれないが、やはり人間だというより仕方がない」女性の不可解な存在に置き換えられて、諦めくられようとするが、直ちに「林小姐だって混血児であることは間違いなしな。T氏の子供たちだって、この問題にひっかかってくる」と思い至る。この時、「私」は中国語の「雑種」という「不気味な言葉」を思い出し、こう述べる。「それは、他人を罵るときに、よく使われる。ツァチュンは、単なる混血児の意味ではない。血がまじり合っては何故いけないのか。だが、どうも、ツァチュンという語の響きは、われわれをおびやかす。雑種子と子までつけて、私生児をよぶこともある。だけど、人類はだんだん雑種の方が殖えてくるにちがいないのだ。合の子は、何も特別なものではない。だが、そうばかりいって済むことではないらしいぞ。ともかくツァチュンを避けて通るわけにはいかない。「私」は中国語の「雑種」という言葉の差別的なニュアンスに不満を覚え、混血が今後増えつつあるという確信を述べる。『上海の蜚』から25年前の小説「女の国籍」(1951年)でも、泰淳は日中混血児の女性主人公の父の口を借りて、これと似たような言葉を伝えている。¹⁸⁾

『上海の蜚』で、「私」は周囲の日本人から「(中国人——筆者注)が好きでなくても、好きなふりをしているというわけね」と言われて、「ぼくは知り合いの中国人を、一度だって、ぼくとちがった人間だと考えたことはないからねえ」と答えているが、このセリフは「女の国籍」の末尾の語り手の嘆き(「日本人か中国人か詰問されないですむ時代、それはいつ来るのでしょうか」)に呼応しているように思われる。

3、日中融合論

日本人も中国人も「同じ人間」という考え方は、戦後二十余年間、泰淳の中で一貫していたことが窺えるが、泰淳は小説の中だけではなく、評論においてもこの考えを繰り返して主張している。例えば1971年の文章「中国人と日本人」で、「日本人も中国人も同じ人間であるという基本的な考え」を強調し、「日本人とはこれ、何であろうか。中国人とはそれ、何であろうか」という問いに対し、「私にいわせれば、何であるかわかりはしないのである。どこの血がまじって、こうなったのか、ああなったのかはわかりはしない」と述べている。そして「中国と日本はやがていつの日かひとつになれると、思う。百年もたてば、きっとそうになってしまうだろう」と結んでいる。¹⁹⁾

このような泰淳ならではの日中「融合」・「化合」論はどのように理解できるのだろうか。最初に考えられるのは、日中「融合」・「化合」論は、占領国と被占領国の壁を越え、「同じ人間」という立場に立って中国人の「心理の奥底」「心のうち」²⁰⁾に触れようとする心性から出たものだという点である。これは中国文学研究会同人の共通の初心でもあった。次に考えられるのは、泰淳が上海での敗戦体験によって、自己救済として必死に掴んだ「国というものは亡びるものである」という宇宙感覚²¹⁾、つまり国家滅亡観が「融合」・「化合」論の前提になっている点である。これは、泰淳が日中近現代史に翻弄される中で獲得した思考でもあるように思われる。例えば『風媒花』において、竹内好がモデルとなっている軍地は、日中混血児の三田村の本質を分析して、「峯が昔、俺にそう言ったことがあるよ。日本人全体が中国人になるか、中国人全体が日本人になるかしなけれや、中日両国のあいだには血なまぐさい事件は絶えないんじゃないかってね。あんたのいうのはその意味なんじゃないか。つまり血なまぐささの中で仕事をしようとしているんだらう」と述べている。このセリフから見られるように、泰淳の「融合」・「化合」論は血なまぐさい一面をもつものであったが、それは泰淳が「アジアにおける一国の発展が、他の一国の発展をさまたげ圧迫するという不幸な運命」を冷徹な目で眺めてきたからであろう。²²⁾

つまり、泰淳の日中「融合」・「化合」論は、国家の「滅亡論」を前提とする暗い思考から出発し、厳しい両国関係を見つめる中であって、「同じ人間」という信仰を持ち続けようとする意志の産物であったと言えよう。

4、「女性」にまつわる「混血」問題

「左翼くずれ」と「混血」は小説『上海の蛍』のキーワードであると先述したが、「女性」という存在に対する強烈な関心もこの小説の至るところに現れており、「女性」は泰淳の「混血」観を引き出す契機にもなっている。「雑種」の章で、「混血」の言説は、理解不可能な存在である「女性」に対する戸惑いと関連する形で述べられている。「どうして柄にもなく、こんなことを考え出したのであろうか。それは結局、女性が好きでたまらないからだろう」と「私」は自嘲する。「上海にいる間は、私は男性ではないのだ」と禁欲宣言をしながらも、まわりの女性(林小姐、夏女士、王媽、藤野さん、博士夫人)に向けられる旺盛な好奇心や欲望が小説の全体に現れている。とりわけ印象に残るのは、「私」の夢に現れた屍体になった夏女士の女体である。夏女士は「私」の上の部屋に住む、はでな男性関係を持つ中国人女性である。夢の中で、夏女士の屍体は「黒檀に似た寝台」に支えられて「私の頭上で宙に浮かんで」いるが、その「黒檀に似た寝台」とは全て蛍であった。蛍は「…支えながら、彼女を食べていたのだ。…脳も臓腑も、すべて喰われてしまっている」。この「むずむずするほど密集した」蛍は夏女士の欲望の象徴でもあれば、爛熟した女体に対する「私」のやりきれない欲望の現れとも言えるのではないだろうか。

この中国人女性の女体の描写は、評論「滅亡について」に於ける有名な喩えを連想させる。

…日本の文化人にとって、滅亡がまだまだごく部分的なものであった…彼らは滅亡に対してははまだ処女であった。…／これにひきくらべ中国は、滅亡に対して、はるかに全経験が深かったようである。中国は数回の離縁、数回の奸淫によって、複雑な成熟した情欲を育まれた女体のように見える。

ここにおいて、中国という国は中国人女性の肉体と見事なまでに重ねられており、泰淳の滅亡観を鮮やかに浮かび上がらせている。このような滅亡観を背景として、泰淳の「混血」観は展開されていく。

5、生物学的な「混血」：外部の多元性

以上、『上海の蛍』に見られるように、泰淳は敗戦前後の上海体験によって「混血」に強烈な関心を寄せるようになった。彼は中国文学者として周りの日中混血児の生き方に常に興味を持っていたが、その関心は後に日中融合論まで発展されたと言えよう。また、混血児の女性および中国人女性への探究心は、国家「滅亡」の論理にも関わっているように、日中混血児にしろ、混血児の女性にしろ、『上海の蛍』などの「上海もの」に表象された多様な「混血」は、多元的な外部を持つ存在として泰淳を刺激したと思われる。この多元的な存在の「混血」に対する泰淳の関心を貫いているのは、国家「滅亡論」という発想であった。

当時の上海には、日中混血児以外、「白系ロシア人、亡命のユダヤ人」、朝鮮人、貧乏なイタ

リア人やギリシア人が蝟集していたが、泰淳はこれらの「祖国喪失者」に常に温かい眼差しを送っている。泰淳は、「身分証明書のほかに何一つ守ってくれる物のない他国で、他人には理解できぬ生き方をしている連中の、強靱な楽天性」に感銘を受けたと述べている。²³⁾ 彼らは国家から切り離された個人として生きていく上で、一つの立場に限定されない多元な内部の可能性を持つことになる。泰淳は、祖国を喪失して異国で生きる彼らの中に、生物学的な「混血」を超えた実存的な「混血」性を見たのではないだろうか。この問題を、1952年の長篇小説『風媒花』の分析と合わせて考察したい。

三、『風媒花』に於ける混血孤児の居なおり——内部の多元性

1、『風媒花』の成立と評価

『風媒花』は1952年1月から11月まで雑誌『群像』に連載された。連載の二年前の1950年6月朝鮮戦争が勃発しており、一年前の1951年は対日講和条約と日米安保条約の調印の年であった。1952年は「運動としての戦後文学はすでに姿を消しているが、戦後派作家の一人一人が個性の成熟を迎えようとしている時期にあたる」。²⁴⁾ このような時代を背景に誕生した『風媒花』は、「敗戦後における武田氏の中国にたいする基本姿勢を描」き、「中国離れと再発見」という「研究者から作家への転身のプロセス」を示す作品であった。²⁵⁾

『風媒花』は評者によって毀誉褒貶相半ばするが、褒か貶に關係なく²⁶⁾、泰淳におけるこの作品の重要性は認めざるを得ない。篠田一士は「氏の記念碑的な作品の一つ。この作品によって少なくとも武田氏の文壇的地位は一挙に確立された…武田氏の文学を多少とも真面目に考えようとするなら、ぜひとも手にとってほしい」と薦めている。²⁷⁾

この小説の主要人物の殆どは実在のモデルがいる。エロ作家と自称する峯三郎は泰淳であり、「中国文化研究会」は「中国文学研究会」、研究会の主宰者軍地は竹内好、峯の同棲相手の蜜枝は執筆前年(1951年)に結婚した妻の鈴木百合子、小説の冒頭に転落事故で危篤に陥った峯の義弟・鎌原文雄は泰淳の実際の義弟・藤田寛雅、文雄の娘である露子のモデルは実際の姪由佳である。²⁸⁾

但し、軍地に劣らぬ存在感をもつ重要人物の一人、混血の美少年である三田村のモデルは判然としない。三田村は、評者から最も面白く描けていると好評された蜜枝とは反対に、「三田村というのが一番ハリボテみたいですね」と酷評されている(連載切り上げ直前の創作合評)。²⁹⁾ 比較的好意的な評論を寄せた三島由紀夫も、「軍地、中井、三田村、やや作り物の感を免れない」と不満をもらしている。³⁰⁾ 実際のモデルがいる蜜枝や軍地などの人物に比べ、三田村には確かに観念的な「作り物」の匂いが否めない。この全知全能の混血の美少年を作り出した泰淳の意図はどこにあるのかを次に検討したい。

2、泰淳の「竹内恐怖症」

泰淳の考えについて、本多秋五は次のように読み解いている。「この小説は、竹内好もしくは竹内好的な立場をさまざまな角度、さまざまな光線のもとに検証、中国文学研究会もしくは竹内好に対するいい分を表現するという性質をもっている。少なくとも『風媒花』は、そのような角度からも読まれうる小説である」。³¹⁾ 実際、小説には軍地に対する批判や意見が多く現れている。峯や、三田村、研究会を脱会して右翼に転向した日野原はもとより、研究会の若い中堅である原さえも、軍地が「あまりに文学的、あまりにひとりよがりに見えるのです」と批判している。ある評者は、蜜枝の「一日の行動を描いた部分が、もっとも面白おかしく読者に不思議な解放感をあたえるというまさにその事実こそ、作者の軍地的・竹内的立場に対するいい分を表現したものといえなくもない」と述べている。³²⁾ 奥野健男は「竹内さんに対する、あるいは中国文学研究会に対するコンプレックスは、ずいぶん武田さんにはあるような気がする…『L(魯迅)恐怖症』というが、ほんとは『T恐怖症』じゃないかという気がしたくらいだ」と指摘する。³³⁾

『風媒花』の中で非難的となっている竹内好は、「武田泰淳の『風媒花』について」³⁴⁾で『風媒花』を酷評し、最低位に視線をおいた作者の方法の不徹底さを批判したが、それに対して泰淳は「あの場合の僕だって、決して胡坐をかいているわけではない。…あそこまでしか書けなかった」と弁解している。³⁵⁾ 一方、小説で大衆小説作家・エロ作家と設定される主人公の峯は、次のように弁明している。

軍地は「峯は現状にあぐらをかいて、居なおる気だろ」とぬかしたっけな。冗談じゃない。小毛には小毛の真剣さがあるのだ(小毛は趙樹理『李家荘の変遷』の人物——筆者注)。ただその真剣さが四分五裂だから、あんたほど御立派には見えないだけじゃないか。居なおりや居すわりは、そっちのことじゃないんですか。

このセリフを読んだ竹内は「これは、なるほど、と、思って、いくらかギクツとする」と述べている。³⁶⁾ だが「いつでも自分が文学的に正しくなければ、居ても立ってもいられない」³⁷⁾ 竹内にとって、「弱者」である峯の居直りは理解できないものであった。その「弱者の居なおり」こそ、泰淳に小説『風媒花』を書かせた心理的な動因だったのではないだろうか。

3、弱者の居なおり

『司馬遷』において泰淳は「私は無力だ」という告白をくり返し強調している。³⁸⁾ 『風媒花』の峯が夢の中で変身した趙樹理『李家荘の変遷』の登場人物・小毛も「徹底的な弱者」であり、彼は「もっともみじめな、もっとも下劣な中国人」であり、「どっちの時代にも、小毛はダメなんだよ。両方から軽蔑され、嫌われて、悲鳴をあげて生きてる」人物であった。峯にとって小毛の醜態は「全くひとごとじゃないんだ」。その弱者小毛は、自分の「しでかしたことを後

悔なんぞしやしない。これが結局、俺そのもの、俺の全身全霊だったんだからな。…死んだって、生きてって、この俺は俺以外になれないんだぜ」と居なおる人物でもあった。

小説には、小毛、蜜枝といった弱い人間だけではなく、か弱くも激しい生物や小動物に対しても共感を寄せる描写が随所に現れる。例えば冒頭部分で、教会堂にへばりついている蔓草が描写されるほか、最終章「灰の花」では焼かれた昆布の描写がある。昆布の黒褐色の肌に噴いた藁の疣に似た粒を見た蜜枝の弟の守は、昆布に「乾されてもなお匿し残した、海草の執念ぶかいエネルギー」を感じ、「昆布って、まるで峯みたいな奴だな」というセリフを言う。また、子猫のため必死に穫物を探し、「まるで肉の丸みをへぎ落とされている老猫」は「異様な凄みを含んでいた」殺気で小犬に向かい合っていく描写がある。「親子三匹の痩せ方のひどさと、親猫の無愛想な必死さが、守に、一種のものすさまじさを感じさせた。…そういう生物の状態が、この人影のない塵芥捨て場の近くに、厳存しているという事実が、その事実そのもので直接、彼を打った」。また鼠も描かれている。鼠捕りに捕まった鼠は「跳り上がって後退する度、丸くした鼠の背は鼠自身が驚くほどはげしい勢いで、鉛色の柵に打ちつれられた」、「一晩中、金属製の檻と格闘した小動物の疲労が守の背すじにズンとこたえた」。このように、蔓草、焼かれた昆布、痩せ衰えた老猫、捕まった鼠などの弱者たちは生きるために驚くほどのエネルギーを爆発させる。これらの描写によって、作者泰淳の生への執念が読者に伝わってくる。

竹内好が指摘するように、泰淳は度々小説で自分を極小化、矮小化して難関を突破しようとする。竹内は泰淳に対して、「いつか極小であるべき自己への安住となって、逆に事物へ突き進もうとする観察の方をにぶらしてしまったのではないだろうか」と懸念するが³⁹⁾、泰淳はそれに取り合わず、自分の居なを執拗に追求した。その泰淳の追求こそが、軍地（竹内）と真正面から対立する三田村という人物を作り出したのではないだろうか。三田村は、峯が軍地に言いたくとも言えなかった主張を一步進めて述べている点で、八つもの理由を並べて三田村は峯の分身だとする論者もいる。⁴⁰⁾ 実際、小説において三田村だけが二回も軍地と長く意見を戦わしている。

4、混血児三田村：弱者／強者の弁証

問題は、なぜ三田村が混血児でなければならなかったのかである。

軍地をはじめ、中国文化研究会のメンバーたちは「中国と日本の間に橋を架けよう」としていた。それに対して、中国人の母と日本人の父の間に生まれた三田村の場合、「私の体内、私の血液の流れの中で、橋はとっくの昔に架かっちゃっているんです」と言う。彼は、「心理的精神的には、日本人であると同時に中国人であろうとする、無理な企てを敢えてせねば」ならぬ中国文化研究会メンバーに対し、「あなたがたは幸か不幸か混血児ではない」と言い放ち、加害者でありながら被害者の立場に立とうとする彼らの使命感を「滑稽な役割」「矛盾だらけ」と揶揄する。日中混血児という出身上の「優位」は、研究会を主宰する軍地の「文学的な」「潔癖」に非難する資格を与え、三田村は、自分は加害者と被害者という枠に縛られない存在

だと意気揚々としている。一方、テロリストである彼は、大量無差別毒殺などの「恐怖と戦慄を手段」にした「融合」と「化合」を考え、「流し合った血潮が両方から流れ寄って、一つ血に合流する」というような日中「融合」論をぶちあげるなど、強者・行動者・加害者の理論を展開する。

だが実際、混血児である三田村は複雑な人物として描かれている。「混血」という身分は「両刃の剣」であり、「加害者と被害者」の枠に縛られない自由をもたらすと同時に、「天涯孤独」のようなアイデンティティの不安と葛藤がついてまわるからである。「両方から軽蔑され、嫌われ」る「小毛」の悲鳴は三田村の悲鳴でもあった。金銭、権力、女性、これら全てに不自由ではないように見える美青年の混血児である三田村は、弱者・無力者・被害者でもあった。

彼は、自分の中国人の母が戦争中、青天白日旗と孫文の写真を部屋に飾っていたために、横浜で日本商人にいじめ殺されたという過去を持つ。三田村は軍地に母の死に方を尋ねられると、「……よしましょう。そんな話は。思い出してもゾッとしますよ」と避ける。北一輝を連想させる大陸浪人の細谷源之助は、三田村は「日本人にも中国人にも成りきらんのじゃ」と述べる。三田村は、軍地と砂浜を散歩している時、砂を運んだり篩い分けたりしている朝鮮服の人が目に入る、「さして金になる仕事であるわけはなかった」が「朝鮮半島へ帰っても、そこには別の恐怖がまちかまえているにちがいなかった」。続けて小説では「海を見つめている」朝鮮人老婆の姿が描かれ、「それはいかにも海べりまで追いつめられた、移住民のみじめな立姿であった」として、次のように語られる。

他国に住みつこうとする他民族の苦しみを、三田村はよく知っていた。中国研究者軍地より、混血児三田村は、骨身にしみて、生活的にそれを知っていた。

三田村は、自分を可愛がってくれた大陸浪人の細谷源之助が寄寓している清風荘の主人から、「三田村は危険な男だよ。目が放せない。やっぱり血は争えないもんだよ」と言われ、「毒針の如く」傷つけられる。恋愛面でも、蜜枝と守の彼女の桃代に好意を寄せられながらも、蜜枝と心中を企てた三年前の事件を思い出すと「淡い哀愁が、この混血児を包んだ」というように、癒えない傷を抱えている。

つまり、高慢に振る舞う三田村は、実際には「混血」という宿命によって様々な辛酸を嘗め、重いコンプレックスを背負って生きている人間であった。彼は「日本人に対して加害者になってやろう」と放言するが、それは混血孤児の復讐であり、弱者の居直りであった。この三田村という人物の魅力は、混血に因む弱者の宿命を突破しようとする強者たらんとする点にあったのではないだろうか。この三田村の姿勢こそ、泰淳が『風媒花』を通じて読者に訴えたかったことであつたと思われる。埴谷雄高は泰淳の作品における「非権力者たることの強者、無能たることの強者という極限的な逆説」を指摘している。⁴¹ 泰淳自身はエッセイ「ほくと上海」で、強者と弱者の関係について、「自分が悪と無縁な弱者であると考えていたのはまちがいで、

ことによると、研究と経験さえ積み上げれば、悪を実行できる強者になれるかもしれんぞ、と思うようになった」と述べている。⁴²⁾ 三田村という混血孤児はまさにこの逆説の劇画的な体現者であろう。強者／弱者、権力者／無力者の相対化によって、後者は前者に対抗しうる「自身の独自の存在理由」を見出し⁴³⁾、弱者の居直りとしぶとさを頼りに生きて行くのである。

5、実存的な混血と内部の多元性

『風媒花』に描かれた在日朝鮮人の様子は、『上海の蜚』など泰淳の上海ものにおける「自国の保護をうけていない追放者や放浪者や亡命者」⁴⁴⁾を思い出させるが、アイデンティティの着地できる場所を失った点において、「祖国喪失者」と「混血児」は共通している。『風媒花』では、「他国に住みつこうとする他民族の苦しみを」「中国研究者軍地より、混血児三田村は、骨身にしみて、生活的にそれを知っていた」と述べられるが、それは泰淳が混血児と「祖国喪失者」の内在的な繋がりを意識してのことであつたと思われる。生物学的な「混血」を超越する実存的な意味において、敗戦後の上海で祖国日本が既に亡国したと思ひ込んだ泰淳や、上海に集まった白系ロシア人や亡命ユダヤ人など「祖国喪失」のヨーロッパ居留民、朝鮮戦争中の在日朝鮮人たちはいずれも「混血児」と言えるのではないだろうか。

ヨーロッパ居留民の「強靱な楽天性」は、敗戦直後の亡国感覚に陥った泰淳の目に強烈に映し出されている。「海を見つめている」在日朝鮮人老婆の「陽焼けした額」、「悲しみも怒りも読みとれぬほど、黒く深い皺」は、泰淳が戦争中に見かけた「黒く日焼けし素朴に見えますが彼らの心は青黒く深い潭のよう」である中国「土民」の顔に相似している⁴⁵⁾。異国における祖国喪失者のしたたかさは、実存的な「混血」の人々の共通の特徴として描かれている。このような意味において、泰淳の見出した「混血」は、一つの生存の「方法」であつたのではないだろうか。

戦後派文学者としての泰淳は、自分の「潔癖性」を信じられない点において、以前の私小説作家と一線を画している。⁴⁶⁾ 泰淳は『風媒花』において「正しくなけれや、一刻だって生きていられない」軍地（竹内好）の「潔癖性」を繰り返して批判する。このような「潔癖性」への不信が、「純血」重視の「民族」への反撥を生み、「混血」というあり方を発見させたと思われる。

だが、それは同時に「混血」であるが故のアイデンティティの葛藤をも引き受けることを余儀なくするものであつた。本多秋五は泰淳の作品に、文化人である「私」のなかに、もう一人の「恥知らずで、図図しく、野獸的な実行力をもっている」「私」が住んでいると見て、「武田泰淳が、かつて外部にみとめた多元論を、おのれの内部にもみとめたのである」と論じているが⁴⁷⁾、泰淳の「混血」観においても、この「多元性」が認められるのではあるまいか。「混血」の不純性は、血という生物学的な外部の多元性に止まらず、弱者／強者、権力者／無力者の相対化と弁証転化において、内在的にも多元性を抱え込まざるを得ない。『風媒花』の混血児である三田村の複雑性は、このような内在する多元性の現れでもあつた。

四、『上海の蜚』と『風媒花』：はざまを生き抜く

『風媒花』には、『上海の蜚』に登場する実在の人物と連続性・関連性を持つ人物が登場する。例えば『上海の蜚』に一度だけ顔を見せる「創造社」同人で恋愛小説家の張資平は、『風媒花』の主人公である大衆小説作家・エロ作家の峯を想起させる。張資平は「日本側からも、中国側からも、すでに忘れられかかった存在だった。抗日戦線から軽蔑されていたし、占領区内でも重要視されていなかった」。この「両方から軽蔑され、嫌われて」いる苦しい立場は、峯の化身「小毛」に通じている。

また、「日中文化混血児」⁴⁸⁾と呼ばれる陶晶孫 (T氏) が自分を投影する蘇曼殊は、「身世言い難き恫み」⁴⁹⁾ に苦しむ日中混血の詩人であるが、『風媒花』の三田村と一致する点が存在するのは興味深い。三田村は蘇曼殊と同じ「横浜生まれ」に設定されている。また、三田村の身上は「あいのこ」という言葉が用いて説明され、そこに傍点が打たれて強調されているが、蘇曼殊もまた「アイノコ」と呼ばれていたという。中国文学研究会のメンバーであった飯塚朗は、蘇曼殊の訳文集の解説で次のように述べている。「アイノコ、当時横浜中華街の華僑の間で華父日母の混血児を相子と称したそうである」。⁵⁰⁾

連続性・関連性を持つもう一組の人物は、『風媒花』に登場する国民党系のジャーナリストである桂と陶晶孫である。桂は、日中戦争中に重慶でジャーナリストとして活躍し、1949年中華人民共和国が建国した時に来日し、そのまま日本に留まる人物という設定である。細谷源之助は戦争中に母を失った混血の少年の三田村を可愛がったが、桂のことは嫌悪し、「わしは、自己保存の本能ばかり強くて、理想のない男はきらい」と言う。また研究会のメンバーも、国民党政府出身であり、中国に帰らず「祖国と直結していない」桂を信用しない。

一方、陶晶孫 (1897-1952) は 1950年6月に家族と台湾を脱出して来日し、1952年2月に肝臓癌のため市川の病院で死去した。当時の年齢は桂と同じ五十代だった。ところで陶晶孫のデビュー作のタイトルは「木犀」であるが、「木犀」は中国語で「桂花」である。泰淳は創造社系作家の作品を愛読しており、この作品を当然知っていたはずである。桂は、研究会で自分がQ (郭沫若——筆者注) の親友であり、郭の日本脱出にも関係したと言うが、郭沫若は陶晶孫と相婿同士で、日本留学時代からの親友であることはよく知られている。そればかりでなく、桂と同様、陶晶孫の当時の立場は微妙なものだった。彼は 1931年に日本側主宰の「上海自然科学研究所」病理学科の研究員となり、戦争中も上海に残り、1944年の第三回大東亜文学者大会にも出席している。台湾国民党政府のレッド・パージによって日本に亡命したとはいえ、戦争中の立場が曖昧であったため、中国大陸に帰る決意を固めかねていた。「わたしの立場はむずかしい。…政治の話は抜きにして、芸術や文学を語ろうよ」という桂のセリフは、『三田文学』座談会に出席した時の陶晶孫の発言を連想させる。⁵¹⁾

泰淳は「中国の作家たち」⁵²⁾ において、「戦争中日本と接近した」作家の一人として陶晶孫

の名前を挙げ、郭沫若、郁達夫など創造社の同人の運命を慮って「文人行路難」を嘆き、郭、陶の日本人夫人たちの身の上を心配している。また、後年の陶晶孫の追悼会は当時泰淳が住んでいたお寺で行われたように⁵³⁾、泰淳は陶晶孫に親愛の情を寄せていたように思われる。だが、泰淳は1950年代、陶晶孫について殆ど語らなかった。⁵⁴⁾ 陶晶孫は来日後、軽妙な日本語で文章を綴って文名をあげ、彼の遺作「中日友好のために」⁵⁵⁾が『群像』に発表されたのは『風媒花』の連載中であった。陶晶孫の死後、彼の友人によって作品集『日本への遺書』⁵⁶⁾が編集・出版され、竹内好、奥野信太郎など中国文学関係者は次々に賞賛の書評を寄せた。その流れに逆らうかのように、泰淳は、彼が昔愛読した作家であり上海時代の知人でもあった陶晶孫に関してついに一言も語らなかった。「わが読書」(『群像』1953年2月号)で、奥野信太郎が陶晶孫『日本への遺書』を推薦したのに対し、武田泰淳が選んだのはランドルフ・ロバンの『さかさまの世界』であった。

後年、泰淳は「良心的な中国文化人が、日本占領下の上海に、とどまっているはずがない」⁵⁷⁾と述べた。また「その頃の上海文人は一流ではなかった。重要な部分は、かくれていて、近づくものは浅はかだった」⁵⁸⁾とも述べている。泰淳にとって、上海に留まった陶晶孫は「良心的」でなく、「浅はかだった」中国文人だったのだろうか。「中国の小説と日本の小説」⁵⁹⁾など泰淳の戦後の中国文学論を読むと、陶晶孫は明らかに泰淳の考える「(支配されている——筆者注)現状を打開できる」、「打開する運動に参加する」中国人作家ではなかったことが窺える。泰淳は、台湾を脱出して日本に留まった陶晶孫を、「自己保存の本能ばかり強くて、理想のない男」と厳しく見ていたのではないか。はざまに立って苦しむ弱者の居なおいを「混血」の特性と考えていた泰淳にとって、文化アイデンティティの「混血」と「自己保存」を併せ持とうとする陶晶孫は許せないものだったと思われる。それ故、陶晶孫の日本に対する文明批評を読んだ竹内好が「胸の奥にひびく」⁶⁰⁾、「ドキリとした」、「耳が痛かった」⁶¹⁾と言うのとは対極に、泰淳は終始沈黙を守ったのではないだろうか。

五、おわりに:「混血」と「越境」

以上、検討してきたように「混血」は武田泰淳文学に於ける重要なテーゼである。とりわけ泰淳の中国関係の作品を論じる時、その重要性は一層高まる。

泰淳の「混血」観は、彼の上海体験に密接に関係している。泰淳は「混血児の溶鉱炉」に身を置くことによって外部の多元性に目を開かれ、日中混血児に関心を寄せていった。その上海で彼は、日中の戦争の歴史を顧みた時、滅亡論を前提とする、民族と国家を超越する日中融合論を展開させたのであった。

だが、泰淳にとって「混血」は単なる生物学的な現象ではなく、一種の実存的な「方法」として認識されていたと思われる。泰淳の「混血児」の範疇には、異国で生きる「祖国喪失者」も含まれている。実存的な「混血」は、立場の複雑性とアイデンティティの葛藤を意味すると

同時に、内部の多元性によって、弱者／強者や無力者／権力者という対立を相対化し、弱者の居なかりを与えられ、強靱な生き方を志向する。つまり「混血」は人間が生存するための一つの「方法」として見出されたのだと言えよう。

日中戦争期、日本の国策文学において、日中混血児は「日本人」として登場させられる一方、中国の抗日文学では「中国人」として扱われた。⁶²⁾ 混血児の複雑なアイデンティティをイデオロギーによって固定化するこれらの言説に対し、中国文学者から転身した戦後派作家・武田泰淳の「混血」観は、その深みと凄みにおいて読者を感動させずにいられない。越境文学が盛況である現在においても⁶³⁾、武田泰淳の文学世界に現れる、外部の多元性を尊重し、内部の多元性を活かして強靱に生きる「混血」という思想は、越境を志向する者にとって有効な「方法」であり、新しい越境文学の一つの思想資源になると言えよう。

注

- 1) 武田泰淳の経歴は「武田泰淳年譜」(川西政明『武田泰淳伝』講談社 2005 年)を参考にした。
- 2) 武田泰淳(1940 年 1 月)「支那文化に関する手紙」『中国文学月報』第 58 号。
- 3) 武田泰淳(1951 年 10 月)「女の国籍」『小説新潮』10 月号。
- 4) 武田泰淳(1943 年 4 月)『司馬遷』日本評論社。
- 5) もう一つの「論理的な柱」は「無感覚な殺人論」だという。埴谷雄高(1956 年 2 月)「風媒花」解説(『風媒花』河出文庫)。埴谷雄高編(1982 年 11 月)『増補武田泰淳研究』全集別巻三 373 頁 筑摩書房。
武田泰淳は「私の小説の発想は、ほとんどこの二つの文章に要約されている」、と表明している(「作家と作品」『文学界』1951 年 7 月号)。「二つの文章」とは 1948 年春に執筆された「滅亡について」と「無感覚なボタン」を指す。
- 6) 武田泰淳(1948 年 4 月)「滅亡について」『花』第 8 号。
- 7) 三宅芳夫(1998 年 4 月)『「鉄の殻」への問い 武田泰淳における「民族」への眼差し』『現代思想』第 26 巻 5 号。
- 8) 郭偉(2007 年 2 月)「武田泰淳『女の国籍』論」『立命館言語文化研究』第 18 巻 3 号。この郭論文に対する大橋毅彦、鈴木将久などによる「コメントおよび質疑応答」(同号掲載)において、「混血」に関する言説は異類婚、「ディアスポラ」論、堀田善衛との比較論へ展開して検討されており、多くの示唆を得た。
- 9) 大橋毅彦(2008 年 6 月)も『上海の蜚』注釈において、混血児の登場は武田泰淳の文学世界に「独特の熱度と活力を賦与していく上での動力源になっていた」と指摘する上に、同じく「女の国籍」を例にとって、「混血の怪物」と呼ばれるものは差別的な「体制に向けて投げられる一個の爆裂弾ともなるのである」と述べる。『上海 1944 - 1945 武田泰淳「上海の蜚」注釈』(大橋毅彦・趙夢雲・竹松良明等編著・注釈) 148、149 頁 双文社出版。
- 10) 『上海の蜚』と『風媒花』は『武田泰淳全集』(筑摩書房)第 18 巻、第 4 巻に収録。本稿の引用は同書に拠る。
- 11) 川西政明(2005 年 12 月)『武田泰淳伝』482 頁 講談社。
- 12) 古林尚(1977 年 1 月 29 日)『上海の蜚』『文人相軽ンズ』『東京新聞』1977 年 1 月 29 日。『増補武田泰淳研究』(前掲)、493 頁。

- 13) 武田泰淳(1976年12月)『上海の蜚』中央公論社。
- 14) 1952年1月号から11月号まで雑誌『群像』に連載。
- 15) 竹内好(1953年5月)「武田泰淳の『風媒花』について」『群像』1953年5月号。
- 16) 堀田善衛(1918～1998)は泰淳と一緒に上海で敗戦を迎えた。最近発見された彼の自筆ノートをもとに編集された『堀田善衛上海日記 滬上天下一九四五』(2008年11月 集英社)は、泰淳の上海生活を知る貴重な資料でもある。その一部及び解説は先に雑誌『すばる』(2008年11月号)に公表された。
- 17) 大久保典夫(1972年7月)「武田泰淳における転向体験」『国文学・解釈と鑑賞』1972年7月号。
- 18) 「今にきつと、混血児があいまいな存在でなくなる時代が来るよ。ね、混血児たちが、新しい時代を造るかもしれないよ。混血児であることを、誇るような世界が出来るかもしれないんだからね…」(前掲「女の国籍」)。
- 19) 武田泰淳(1971年5月)「中国人と日本人」『サンデー毎日』1971年5月号。
- 20) 武田泰淳(1952年)『風媒花』(前掲)。
- 21) 竹内好・堀田善衛・小野忍・埴谷雄高・本多秋五・佐々木基一など(1960年7月)座談会「武田泰淳——その仕事と人間」(上)『近代文学』1960年7月号、21頁。
武田泰淳(1948年4月)「滅亡について」：「世界の国々はかつて滅亡した。世界の人種もかつて滅亡した。これら、多くの国々を滅亡させた国々、多くの人種を滅亡させた人種も、やがては滅亡するであろう。…世界という、この大きいな構成物は、…ある民族、ある国家を滅亡させては、自分を維持する栄養をとるものである。」
- 22) 武田泰淳(1950年10月)「中国の小説と日本の小説」『文学』1950年10月号。
- 23) 武田泰淳(1975年4月15日)「ほくと上海」『日本読書新聞』1975年4月15日。
- 24) 本多秋五(1966年)『物語戦後文学史』(下)44頁 岩波書店(岩波現代文庫、2005年10月)。
- 25) 佐々木基一(1974年7月)「中国離れと再発見」『武田泰淳中国小説集』第1巻「付録V」新潮社。
- 26) 兵藤正之助(1978年5月)は「つまらぬことを一言したい。…発表当時の世評よりも、むしろ作者の精神史を示すような作品で、秀佳作」ではないと批判する。『武田泰淳論』130～131頁 冬樹社。
- 27) 篠田一士(1971年2月)「武田 中村入門」『日本現代文学全集101 武田泰淳 中村真一郎集』426頁 講談社。
- 28) 川西政明(2005年12月)『武田泰淳伝』327頁 講談社。
- 29) 大岡昇平(1952年10月)の創作合評(ほかの参加者は高橋義孝と平野謙)『群像』1952年12月号、190頁。
- 30) 三島由紀夫(1952年12月)「『風媒花』について」『群像』1952年12月号。
- 31) 本多秋五『物語戦後文学史』(下)、前掲書、138頁。
- 32) 岸本隆生(1986年2月)「第四章『中国』への憧憬と『小毛』の自我——『風媒花』論」『武田泰淳論』112頁 桜桐社。
- 33) 奥野健男(1960年7月)「座談会 武田泰淳——その仕事と人間」(上)『近代文学』1960年7月号、20頁。
- 34) 竹内好(1953年5月)「武田泰淳の『風媒花』について」『群像』1953年5月号。
- 35) 武田泰淳(1954年8月)「私の創作体験」中野重治・椎名麟三編『現代文学Ⅱ 創作方法と創作体験』新評論。
- 36) 竹内好(1953年5月)「武田泰淳の『風媒花』について」『群像』1953年5月号。

- 37) 武田泰淳 (1952年)『風媒花』。
- 38) 竹内好 (1952年7月)「武田泰淳著『司馬遷』解説 一」創元社文庫。
- 39) 竹内好 (1953年5月)「武田泰淳の『風媒花』について」『群像』1953年5月号。
- 40) 岸本隆生 (1986年2月)「第四章『中国』への憧憬と『小毛』の自我——『風媒花』論」『武田泰淳論』桜桐社。
- 41) 埴谷雄高 (1960年7月)「座談会 武田泰淳——その仕事と人間」(上)『近代文学』1960年7月号、28頁。彼は1968年6月に執筆した解説「作家と作品 武田泰淳」において、「『強者』と『弱者』」という節を設けて「弱者が強者になるという武田泰淳の価値転換の方式」を力説する(『日本文学全集 79 武田泰淳集』集英社 1974年10月)。
- 42) 武田泰淳 (1975年4月15日)「ほくと上海」『日本読書新聞』1975年4月15日。
戦後文学は「弱者であることも信用しない。弱者であることを告白する、その告白のエネルギーも信用しない」(白井吉見との対談「太宰治と現代文学」『太宰治全集』第八巻月報、1967年11月)。
- 43) 小田切秀雄 (1971年8月)「危険を飼いならす」『武田泰淳全集』第4巻解説、筑摩書房。
- 44) 武田泰淳 (1958年1月)「限界状況における人間」『われらはいかなる人間であるか』毎日新聞社。
- 45) 武田泰淳 (1938年)「土民の顔」『中国文学月報』第44号。
- 46) 武田泰淳 (1952年12月)「『風媒花』の筆者として」(単行本『風媒花』はさみこみ葉、講談社) また、兵藤正之助も『武田泰淳論』(前掲)において、この点に言及する、11頁。
- 47) 本多秋五 (1966年)『物語戦後文学史』(中) 58頁 岩波書店 (岩波現代文庫、2005年9月)。
- 48) 濱田麻矢 (1996年3月)「文化的“混血児”——陶晶孫と日本」『中国現代文学研究叢刊』1996年3月号。
- 49) 藤井省三 (1985年)「蘇曼殊『断鴻零雁記』論」『中国文学論叢』第11号。
- 50) 飯塚朗 (1972年10月)「解説」『断鴻零雁記：蘇曼殊・人と作品』(蘇曼殊著 飯塚朗訳) 289頁 平凡社。
- 51) 『三田文学』の「陶晶孫氏を囲む座談会」(同席者は佐藤春夫、竹内好、奥野信太郎、丸岡明)において、彼は沈從文や老舎など大陸に残っていた作家の状況に関心を寄せる様子を示している。『三田文学』1951年7月号。
- 52) 武田泰淳 (1946年)「中国の作家たち」『人間』1946年第6号。
- 53) 小竹文夫 (1956年6月)「上海にいた作家たち」『群像』1956年6月号、190頁。
- 54) 鈴木将久 (2007年)もこの点について疑問を呈する。大橋毅彦、鈴木将久「コメントおよび質疑応答」『立命館言語文化研究』第18巻3号。
- 55) 陶晶孫 (1952年3月)「中日友好のために」『群像』1952年3月号。
- 56) 陶晶孫 (1952年10月)『日本への遺書』創元社。
- 57) 武田泰淳 (1971年3月15日～19日)「わが思索 わが風土」『朝日新聞』1971年3月15日～19日。
- 58) 武田泰淳 (1946年8月)「中国文学の運命」『文明』1946年8月号。
- 59) 武田泰淳 (1950年10月)「中国の小説と日本の小説」『文学』1950年10月号。
- 60) 竹内好 (1952年11月3日)「陶晶孫著『日本への遺書』」『朝日新聞』1952年11月3日。
- 61) 竹内好 (1965年7月)「日本文の名手」『中国』20号。
- 62) 董炳月 (2006年5月)「婚姻・生殖・共同体——佐藤春夫『亜細亜之子』の周辺」『「国民国家」的立場——中日現代文学関係研究』三聯書店。
- 63) 藤井省三 (2008年8月)「新しい越境文学の登場」『週刊読書人』2008年8月22日。

沼野充義 (2008年9月) 「解説 二つの言語 二つの『地獄』の間で」『千々にくだけで』(リービ英雄著) 講談社文庫。

参考文献

- 『武田泰淳全集』(1978～1982年 増補版) 筑摩書房
『竹内好全集』(1980～1982年) 筑摩書房
雑誌『群像』1952年12月号、1956年6月号
雑誌『三田文学』1951年7月号
雑誌『国文学・解釈と鑑賞』1972年7月号(特集 七〇年代の東洋と日本 武田泰淳)
大橋毅彦・趙夢雲・竹松良明等編著・注釈(2008年6月)『上海1944-1945 武田泰淳「上海の蜆」注釈』双文社出版
郭偉・西成彦等(2007年2月)企画「武田泰淳と上海」『立命館言語文化研究』第18巻3号
川西政明(2005年12月)『武田泰淳伝』講談社
岸本隆生(1986年2月)『武田泰淳論』桜桐社
佐々木基一(1974年)『武田泰淳中国小説集・付録』(全五巻)新潮社
篠田一士(1971年2月)「武田 中村入門」『日本現代文学全集101 武田泰淳 中村真一郎集』講談社
蘇曼殊著 飯塚朗訳(1972年10月)『断鴻零雁記:蘇曼殊・人と作品』平凡社
武田泰淳・堀田善衛(1973年3月)『対話 私はもう中国を語らない』朝日新聞社
立石伯(1977年11月)『武田泰淳論』講談社
陶晶孫(1952年10月)『日本への遺書』創元社
董炳月(2006年5月)『「国民国家」的立場——中日現代文学関係研究』三聯書店
日本文学研究資料刊行会編(1984年1月)『伊藤整・武田泰淳』(日本文学研究資料叢書)有精堂出版
沼野充義(2008年9月)「解説 二つの言語 二つの『地獄』の間で」『千々にくだけで』(リービ英雄著) 講談社文庫
埴谷雄高(1974年10月)「作家と作品 武田泰淳」『日本文学全集79 武田泰淳集』集英社
埴谷雄高編(1982年11月)『増補武田泰淳研究』全集別巻三 筑摩書房
濱田麻矢(1996年3月)「文化的“混血児”——陶晶孫と日本」『中国現代文学研究叢刊』
藤井省三(1985年)「蘇曼殊『断鴻零雁記』論」『中国文学論叢』第11号
藤井省三(2008年8月)「新しい越境文学の登場」『週刊読書人』2008年8月22日
兵藤正之助(1978年5月)『武田泰淳論』冬樹社
兵藤正之助等(1979年2月)『武田泰淳』(現代作家入門叢書)冬樹社
堀田善衛(2008年10月)『上海にて』集英社文庫
堀田善衛(2008年11月)『堀田善衛上海日記 滬上天下一九四五』集英社
本多秋五(2005年)『物語戦後文学史』岩波現代文庫
三宅芳夫(1998年4月)「『鉄の殻』への問い 武田泰淳における『民族』への眼差し」『現代思想』第26巻5号
吉田熙生・菊田均編(1990年12月)『鑑賞日本現代文学』第26巻 大岡昇平・武田泰淳 角川書店
和田博文・大橋毅彦等(1999年9月)『言語都市・上海 1840-1945』藤原書店